

仕方がない

曾根綾子さんは、アラブ人と付き合うには、IBMの精神が必要だ、と書いておられる（『アラブのこころ』サンケイ新聞社）。彼らアラブ人は、事あるごとにこのIBMを連発するからである。

トイレが故障した。修理を依頼する。いつ来てくれるか？……と問う。そうするとアラブ人は威勢よく、

「ブクラ」

と答える。「ブクラ」は「明日」の意である。しかし、明日になっても、誰も修理に来やしない。再び電話をして問う。そうするとアラブ人は、また「ブクラ」と答える。いつもいつも「ブクラ」である。

飛行機に乗るときに、この飛行機、落ちないかしら、大丈夫？と問う。すると、アラブ人は、

「インシヤ・アツラー」

で応ずる。「アツラーの神の御意みこころのままに」といった意味だ。落ちるか落ちないか、人間に保証できるわけがない。それは神の御意によるのである。なるほど、その通りだ。

そして、もし飛行機が落ちたら、

「マレシ」

である。「マレシ」は直訳すれば「理のないもの」であるが、彼らはこれを、「気にするな」「しょうがないじゃないか」「怒る理由はないよ」といった感じで使う。

これがIBMである。Iは「インシヤ・アツラー」、Bは「ブクラ」、Mは「マレシ」である。

アラブ人の「マレシ」は、日本語では「仕方がない」である。そして、わたしたち日本人も、この「仕方がない」の句をよく言う。けれども、われわれの言う「仕方がない」とアラブ人の「マレシ」は、言うべき人間がちがっている。

たとえば、課長が課員に書類作りを命じる。三日以内にやつてくれ、と言う。課員は残業をして仕事をした。最後の日には、会社に泊

まり込んで仕事をやった。それでも出来なかった。そんなとき、課長のほうが、

「よくがんばってくれたね。書類は間に合わなかったが、仕方がない、あきらめるよ」

と言うのである。これを課員のほうから、

「仕方がありませんよ」

と言つてはいけないのだ。課員がそれを言えば、

「仕方がないで済むものか！きみはそんな気持ちで仕事をやったのか！」

と叱られるだけだ。つまり、「仕方がない」は、あくまでも相手が慰めて言ってくれることばで、本人が言つてはならないものである。

だが、アラブ人にとっては、仕事は最初から「インシヤ・アツラー」である。やってみないと、出来るかどうかわからない。神の御意のままであつて、出来ないものはどうやっても出来ない。最初にそのあきらめがある。そして、出来なかった場合は、課員のほうから「マレシ」を言う。課員が「マレシ」を言つても平気なのだ。それがアラブ人の「マレシ」である。日本人の「仕方がない」と、まるでちがったことばである。

仏教では「あきらめ」を説く。仏教の教えは、要するに、

「汝、あきらめよ！」

である。しかしながら、この仏教の「あきらめ」は、必ずしも「断念」ではない。

いま、『岩波・古語辞典』によつて「あきらめ」の語義を示せば、
《あきらめ〔明らめ〕①（心の）曇りを無くさせる。②明瞭に細かいところまでよく見る。③（理にしたがつて）はつきり認識する、判別する。④事の筋、事情を明瞭に知らせる。弁明する。⑤片をつける。処理する。⑥〔諦め〕断念する》

となる。つまり、「あきらめ」は本来「明らめ」であつて、真実を明らかにすることであつた。

ところが、日本人は、最初に真実を明らかにしてはいけないのだ。

社長から仕事を命じられたが、とても困難な仕事であつて、まあ神業^{かみわざ}でもなければ完遂できない。真実を明らかにすれば無理である。しかし、日本人はその場で真実を明らかにしてはいけない。なぜなら、あなたに期待されているのは、その神業であつて、ともかくあなたは努力をしなければならない。人間がやれる限界までの努力を重ねて、あるいは神業とも言うべき努力をした上で、それでも不可能であつたとき、結果的に「あきらめ」てよいのである。

仏教語の「あきらめ」（＝真実を明らかにする）は、最初の段階でなされるものだ。しかし、日本語の「あきらめ」（＝断念する）は、最終段階でなされる。まったく正反対になっている。そここのところに、日本人の民族性があるようだ。（一七〇七文字：引用にあたって一部表記を改めた）

増原良彦『日本の名句・名言』（講談社、一九八八年）より